

水戸自由が丘教会復興感謝礼拝に出席して

小林路津子（牛久教会信徒）

先日は関東でも6年ぶりといわれるほどの積雪が見られ、立春を迎えた今も、寒い日々が続いています。それでも、庭に積もった雪が融け始めると、その下から秋に植えたチューリップの芽が育っていることに気づきます。その、小さいけれど力強い姿は、私たちに“希望”という言葉伝えてくれるようです。

東日本大震災では関東教区の中でも多くの教会がたいへん困難で不自由な思いを余儀なくされることとなりましたが、その一つである水戸自由が丘教会（茨城地区）がこのたび、復興感謝礼拝をされたことは、他の多くの被災された教会にとって、また一日も早い復興をと願っている被災支援委員会の方々はじめ祈りを合わせる多くの人たちにとって、まさに“希望”へとつながるものとなったことと思います。

水戸自由が丘教会をお訪ねするのは今回が二回目でしたが、以前に比べ、明るいイメージに生まれかわったと、この教会を前から知る方々が話しておられるのが聞こえました。その小さな会堂の小さな礼拝に、遠くから、また近くから、たくさんの方たちが思いを寄せて集まっていました。遠くは教団議長の石橋秀雄先生、教区議長の秋山徹先生、教区書記の栗原清先生、他地区の方々の出席もありました。そして近くは茨城地区長の久保田愛策先生、そして同じ水戸の地で被災し、共に痛みを担っている水戸教会と水戸中央教会の方々をはじめ茨城地区諸教会伝道所の仲間たち。茨城に拠点を置く他教派の方々の姿もありました。それぞれに日曜日は各教会での礼拝やお仕事を終えてから駆けつけるといったかたちでしたが、集まった方々からは「ひとつの教会のことを思う」という、その思いの強さを感じました。そして「つながる、つながり」という題で礼拝メッセージをくださった被災支援委員会統括主任で茨城地区の仲間でもある飯塚拓也先生（竜ヶ崎教会）の「つながり」と、「つながっていくことの大切さ」に、ひととき思いを馳せました。

この日は1分ほど遅れて到着してしまいましたが、「お忙しいところなのに、来てくださったんですね」と言って、入り口まで出迎えてくださった水戸自由が丘教会の西上信義先生は、礼拝後、集まった方々の一人ひとりをしていねいに紹介しておられました。また、教会員の方々はお迎えのためにお茶やサンドイッチなどをたくさん用意してくださいました。小規模教会の被災。小さな教会は大きな教会とは違った課題をいつも担っていると思うのですが、そこを襲った突然の震災。水戸自由が丘教会の皆さんはこの10ヶ月間、きっと不安な毎日を過ごされてきたに違いありません。でもこの不思議に穏やかなあたたかいもてなしの中に、そういった不安の影は少しも見当たりませんでした。また「被災教会の再建がなるように」と願って集まった人々の中にも、この「復興」の場面をどうしても目撃したいという気持ちでいっぱいだったのが、とてもよく伝わってきました。そこでは、小さな教会の大きな「復興」の喜びを、感謝とともにすべての出席した人たちが豊かに分かち合うことができたのではないのでしょうか。

関東教区の被災支援の活動は、きっとこれから、とても長い間続くのでしょうか。いつかこの水戸自由が丘教会の復興感謝礼拝のような喜びあふれる集まりが、他のたくさんの教会で行われるそのときまで、それぞれの教会や被災地の痛みを「寄り添う」ことをできる限りしていく、そこに祈りの課題を見る思いがしました。

福島県浪江町仮設住宅・餅つきボランティア ～二本松塩沢農村広場～

本田 彰(大宮教会信徒)

この仮設住宅にお住まいの皆さまは、浪江町請戸地区の方々と、家屋はすべて津波で流され、また福島第一原子力発電所の事故で（発電所から6～7キロ）警戒区域にも指定され、避難して、この仮設住宅に住んでいます。また多く家族を津波で亡くし、三重苦の中で住んでいる方がたくさんいます。請戸地区は気候が温暖でしたが、ここ二本松は寒さが厳しく慣れない中で初めての冬を迎えて、不安を覚えながらの毎日です。私もこの請戸で生まれ育ちました。それだけに複雑な心境です。兄夫婦もこの仮設住宅に住んでいます。

今回は、そのような中で実現した餅つきボランティアです。

前日、教会員有志で、150人分を想定して、食材をすべて準備し、雑煮は煮込んで温めればよい状態にして、17日早朝に9人で3班に分かれて車3台で、現地に乗り込みました。前日の雪で道路が通行止めになったり、凍結のため渋滞していたために、到着時間の予定をはるかにオーバーしてしまいましたが、住んでいる多くの方々に手伝っていただき、おいしいお餅を食べたり、コーヒーを飲んだりしながら、笑顔と笑い声に囲まれながらの交流の時となりました。私の中学校の同級生や、幼小時期にお世話になった方なども来ていただき、悲しい現実を忘れて思い出話にふけていました。

田舎の人は本当にお餅が大好きで、納豆餅にお砂糖をかけて食べる人もいました。一人一人の心の中は、絶望と落胆と無気力感でいっぱいなはずですが、またいつ帰れるかまったくわからない状態で毎日を過ごしていると思うと言葉がありません。そんなことは億尾にもださず、気丈に生きている姿に逆に元気をもらったような気がしました。帰りに、会長さんから、「みなさん、遠方から来ていただいて本当にありがとうございます」と、丁寧な感謝の言葉をいただいた時には、本当に来てよかったと感じました。

一つも収束したものは、ここにはありません。しかし、小さなことでもいま私たちに何ができるかを考えながら、避難している人たちの癒しになることができればと思っています。

先の見えない毎日が、厳しい寒さと一緒になって続きますが、主の豊かな守りと、健康が守られることを祈りながら大宮に帰ってきました。

主の恵と導きによって、何の事故もなく餅つきボランティアの奉仕を終えることができましたことを心から感謝します。

関東教区ボランティア活動への交通費援助について

関東教区では、被災地へボランティア活動に赴く方々の支援として、交通費(自家用車)の援助をさせてもらっています。多くの方々の支えを必要としております。要項は次の通りになります。

①往復の交通費を援助いたします。

(出発地点から、現地までの往復のガソリン代金と高速道路代金)

②車には3名以上が同乗すること。

③申請には、地区委員会の承認を受けて、支援委員会に提出してください。